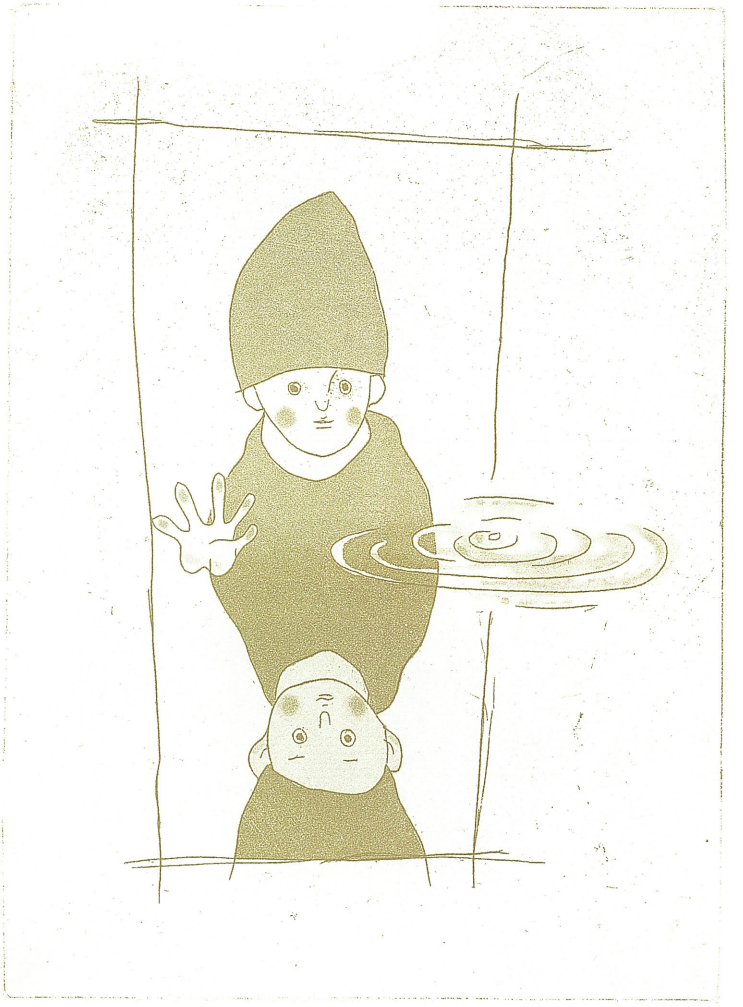
幼児の教育　第104巻　第4号　平成17年4月1日（毎月1回発行）昭和23年4月15日第3種郵便物認可　ISSN0289-0836

幼児の教育

家庭・保育所・幼稚園



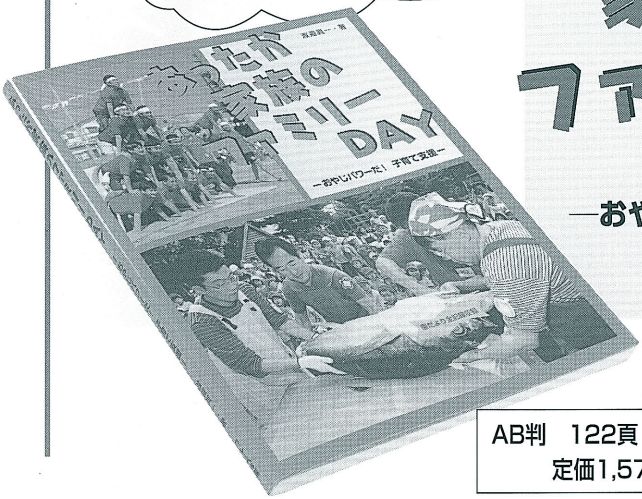
4
2005

第104巻　第4号　日本幼稚園協会

最新刊

“園だより”が織りなす
子育て支援記録 全1冊！

お父さんも
もっと子どもと
遊びたい！



あったか家族のファミリーDAY

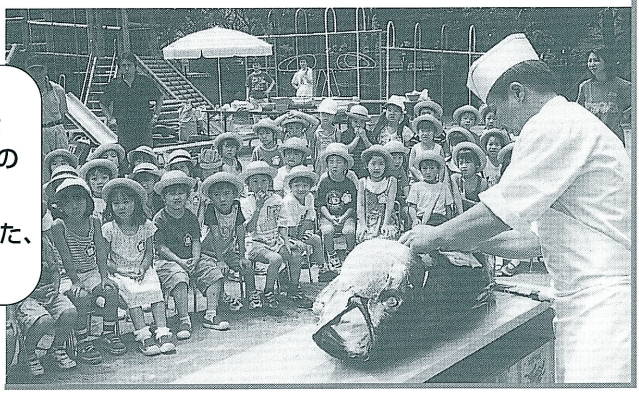
—おやじパワーだ！ 子育て支援—

渡邉眞一・著
（横浜 初音丘幼稚園園長／
スカイハイツ幼稚園園長／
横浜保育室ピッコリーノ園長）

AB判　122頁（カラー口絵4頁）
定価1,575円（税込）

■文部科学省は平成16年度の政策課題として、“親と子がともに育っていく場として今こそ幼稚園の出番”と、新規の子育て事業「親と子の育ちの場」を創設しました。そしてこの事業の一つに“父親の保育参加”があります。ここには幼稚園がもっている親と子の育ちの場という機能を十分に生かし、子育ての喜びを感じてお互いの成長につながっていくような活動を、幼稚園ならではのものとして取り組んでほしい・・・との願いが込められています。（本書まえがきより）

■子育て支援事業を、真摯に考える関係者すべてにおくる格好の実践書。



本書の特徴

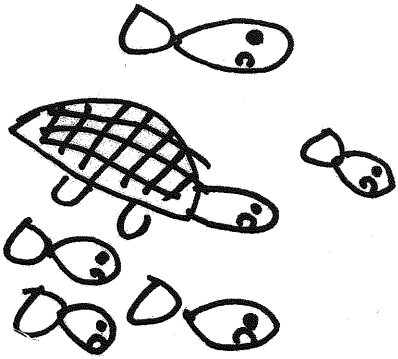
- ●子育て支援記録全１冊
- ●過去6年間の実践記録のすべてを網羅
- ●“園だより”を中心にした、具体的な内容構成

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部（03）5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育

第104巻　第4号



幼児の教育　目次

――第一〇四巻　第四号――

巻頭言　新しい幼保関係の創造……新澤　誠治…（4）

幼児教育の独自性はどこにあるのか(1)　遊ぶ子どもの力……矢野　智司…（8）

特集〈あたらしい〉

カウンセラーの資質……岩壁　茂…（14）

あたらしい出会い……赤澤もとめ…（18）

子どもが生きるクラスに向けて……林　明日香…（21）

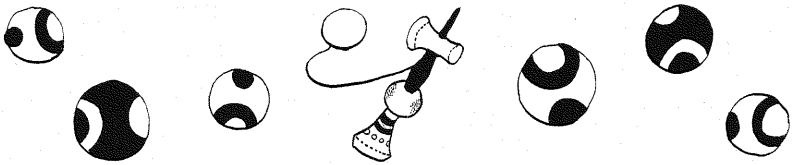
香りがつなぐ新たな出会い……宮崎　薫…（27）

私が通った幼稚園・保育園(1)　私の保育園時代……榎沢　良彦…（31）

© 2005
日本幼稚園協会

ある日……（36）
映画「誰も知らない」の子どもたち……皆川美恵子…（38）
見る・見える・見えない……永倉みゆき…（42）
たけのこ幼稚園とラジオのおっちゃん(1)……庄籠　道子…（46）
障碍をもつ幼児の保育(31)　―この子と出会ったとき―
　この子と生きるうえで大切にしてきたこと(3)……津守　真・津守　房江…（51）
昭和戦中期の保育問題研究会の活動(7)　保育案の研究……松本　園子…（56）

表紙絵／中井絵津子
扉題字／津守　真
扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児
カット／彌永たたえ「花の椅子」
編集委員／浜口　順子・佐藤　寛子・吉岡　晶子・仲　明子
編集部／河合　聡子



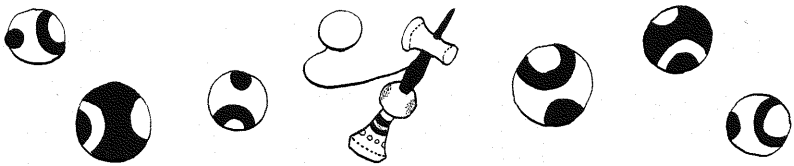
巻頭言

新しい幼保関係の創造

新澤　誠治

私は長い間、下町の小さな保育園の園長として「開かれた保育園」、「共に育て　共に育ち合う保育」と主張し、貧しい子の保育、障害児、延長、産休明け保育に取り組み、子ども、家庭とふれあい、時代の変化の中で変貌する家庭、地域を見つめ、更にその延長として子育て支援センターの所長をつとめました。

こうした保育園の空気、意識が身体にしみ込んだ人間が大学で教鞭をとる傍ら、「附属みどりケ丘幼稚園」の園長になり、受けた当時は異文化の世界に入り込む感じで私は緊張して園の玄関をくぐりました。とにかく幼稚園に馴染み、保育の方針、内容を知ることからと、私は園の歴史、沿革に関する資料を読み、主事と話をし、保育者一人ひとりの話を



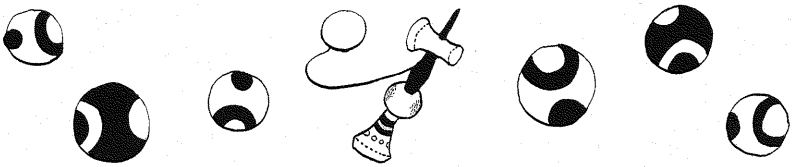
聞いたり、朝は主事と玄関に並び、親子を迎えることから始めました。

当初は、お迎えの時間に「え！　もうお帰り」という感じをもち、お揃いの園児服、カバン、丁寧な朝のご挨拶に戸惑うなど、時間、生活、文化の違いを感じつつも、今まで向こう岸に見えた幼稚園を身近に感じたり、保育者が口々にいう「一人ひとりを大切に！」「思い切り遊べる子ども」等の考え方に共感して、基本的には幼保の保育の原理は変わらないものだと実感し、ここから園長としてのスタートをしていこうと決心をしました。

幼稚園では「預かり保育」を実施することになっていました。保育者の中には預かり保育そのものに反対や「預かり」という言葉にひっかかる人もあったようです。私は「〝もの時間〟としたらどうですか」と提案、ミヒャエル・エンデ作の時間泥棒から時間を取り返す物語『モモ』を思い、預かり保育を子どもらしい時間、世界を保障していく場と考えました。

「この保育の間に母親たちは学習、話し合いの場をつくり、子育て、教育、子どもの環境等を話し合っていきましょう。私はコーヒーでも入れてみなさんと話を聴きますから」と保護者会で宣言しました（実際は体調を崩しサロン計画の実施はまだです）。

次に子どもの名前を覚え、家族と親しくなりたいと考え、「もし、良かったら、祖父母を含めた家族の写真の提供をお願いします」と依頼。わざわざ親の中には実家に帰って祖父母を写してくる人もいて、五月の末にはほとんどの家庭の写真が集まり、それを個人家庭票に貼り、朝の登園前に園長室でじっと見てから親子を迎えました。



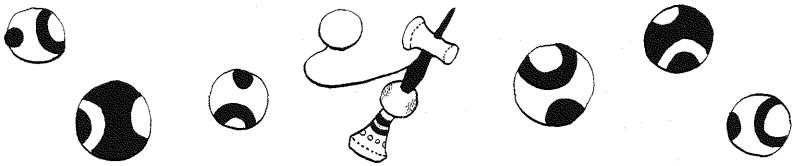
こんなことでスタート、秋に入り「みどりまつり」、十二月には「サンタクロースの来る日」等、大きな行事も一巡しました。この間に主事との打ち合わせ、職員会、保育計画とその実践、諸行事の参加、親との懇談会、期末の反省会が終わると、保育園時代に雑然とした空気の中で「共に」「みんな」で保育と標榜し、園や子育てセンターを運営してきた私には少しずつ、保育の考え方や意識の違いが感じられてきました。

一つには、子ども、親を教育するという意識に縛られ、園と親とは一線を引いた運営で、そこからは園に踏み込まないようにして、保育者は園内の囲みの中で保育に専念、園内で保育が〝自己完結〟しているなということを感じました。

同じようなことですが保育の計画、行事等の準備に多くの時間をとって話し合いをし、期末には年度当初にたてたクラスの方針がどれだけ達成されたかと反省する、計画、実践、反省、評価のサイクルがされている姿に、何か保育の考察の中に子ども、親との対話が抜けて、保育者だけにより「自己回転」しているという感じがしました。

幼保の一体化としての総合施設が国の施策として進められていますが、私は保育の総合化が財政の合理化、規制緩和等の経済的理由で進められ、これからの保育に対する高い理念もなく形だけの総合化になっていると思っています。

新潟地震で山林が崩れ、村の生活が破壊され、あらゆるつながりが分断されるように、いま子どもが育つ土壌である、家庭とその生活、地域社会の共同体が破壊され、このままいくと子どもの生命の輝きを失い、心が壊れていくような危機感を感じています。



「変わらない保育原理」と時代の中で現実に対応した「変わらなくてはならない保育姿勢」があると思います。従来の思考を破り、小さな実践を試みつつ、幼保関係の刷新を図っていきたいものだと思います。そのために幼保一体化に対する両者の制度の論争も必要ですが、同じテーブルについて、子どもをめぐる現状を見つめ、深刻な事態に危惧しあい、それに対応する課題を共有しながら、もう一度、保育のあり方を共に模索していきたいと思います。

幼保にかかわらず、甘える子どもからキレル、荒れる子どもまで、気にかかる子どもが増えてきました。私はいま、全ての子どもが「保育に欠ける」状況と思います。家庭環境の一つとっても、マス・メディアが家庭に入り、地域には安心して遊ぶ環境を失い、親子の養育関係も心配です。「ものの時間」も「家庭との連携」も考えた小さな取り組みです。

総合施設で幼小の連携が言われていますが、私はそれに加えて「幼児と乳児保育の系統性」が重要な課題だと思っています。乳児期の〝愛着障害〟と言われる様な親子関係の歪みが、幼児期に現れ、キレル、荒れるまで発展する事例を多く見てきました。こうした保育の課題を織り込んだ保育を各園で実践され、志向されていると思いますが、それを交流しあい、総合施設が何も施設体でなく地域で幼保が子育ち、子育て支援を連携してつくりだし、新しい幼保関係を創造していけたらいいと思っています。

（東京家政大学）

幼児教育の独自性はどこにあるのか(1)

矢野　智司

遊ぶ子どもの力

この連載では、幼児教育の独自性について考えてみたいと思います。これまでにも幼児教育が学校教育とどこが違うのか、幼児教育の独自性がどこにあるのか多くの人々が論じてきました。その意味では、このテーマはけっして新しいテーマではないのですが、少子化が進み、子どもの生活がこれまで以上に大人の強いまなざしによって囲われ始めているなかで、幼児教育が学校教育に回収されてしまわないためにも、いったい幼児教育の特質が何であるかについて、明らかにする必要があると思います。

そのために、まずは遊びやしつけといった幼児教育のなかの具体的な事象、遊具や絵本や動物といったメディアを取りあげて、そこからこのテー

マについて考えることにしたいと思います。まず一回目は、幼児教育において学校教育にないものとして、「遊び」を取りあげることにしましょう。『幼児の教育』でも、多くの人たちが繰り返し幼児期における遊びの大切さについて述べています。いまさら遊びの大切さについて、新たに何をつけ加えることがあるのでしょうか。しかし、あらためて子どもにとって本当に遊びは大切なのだろうかと問われるとどうでしょうか。なぜ大切なのでしょうか。このような問いを出されたとき、保育者の頭にすぐに浮かびあがるイメージは、楽しそうに飽きることなく繰り返し遊ぶ子どもの姿でしょう。その姿を思い浮かべつつ、保育者はこの問いにたいして「なぜ子どもに遊びが大切かというと、つまり遊びは子どもの発達にとって不可欠だからです」というように答えるのが、オーソドックスな答えでしょう。

そのとおりです。子どもは遊びを通して実にさまざまな能力を発達させます。どの保育者も保育原論の授業で得た知識としてだけではなく、保育の経験を通してこのことの意味をよく知っています。走ることやジャンプすることから細々とした手先の使い方まで、遊びを通して子どもは体の使い方を学ぶことができます。言葉の使い方や、さまざまな社会的あるいは科学的な認識と、本当に子どもは短い期間に多くの事柄が遊びを通してできるようになっていきます。

しかし、このような遊びのとらえ方は、遊びを本当には大切にしない遊び観ではないでしょうか。私にはこのような答えより、遊びが問われたときにまず最初に浮かぶ子どもの楽しそうな姿のイメージの方が大切なことのように思われます。子どもは楽しいから遊ぶ、遊びたいから遊ぶ、だから遊びは大切といってみましょう。このように

いうと、なるほどそうだ、子どもは遊びによって精神の安定を得ているのだからと考えるかもしれません。しかしこの納得の仕方も、最初の答えである「発達にとって大切だから」と実のところかわりはしません。この納得の仕方も、遊びは二次的な意味しかもつことができず、最初の答えと同様、遊びを子どもの発達の手段とみなしているのです。

子どもは発達するために遊んでいるのではないですし、ましてや精神の安定を得るために遊んでいるのでもありません。ただ子どもは遊びたいから遊んでいるのです。それが結果として発達を促すことになるかもしれませんし、また精神的な安定を得ることもあるかもしれないだけです。しかし、それは結果として偶然に得られることであって、遊ぶときに子どもに目的とされることではありません。

この遊びの見方の違いは決して小さいものではありません。もし遊びが子どもの発達を促すから重要であるのなら、遊び以上により効率よく発達を促す方法があれば、遊びは幼児教育に必要なくなってしまいます。たとえば、この遊びの原理にしたがえば、より組織だったルールを持ち体系だった発達を促すスポーツやゲームが、遊びに取って代わることが可能です。あるいは遊びに任せず発達のための組織だった訓練によって、さまざまな認識能力を高めることも可能です。この「発達のための遊び」という原理では、学校教育にたいして遊びが子どもに不可欠であることを弁

護することはできないのです。

私たちの日常の行為の多くは、何か目的を実現しようとするものです。ですからその目的実現にとって、目的を実現するまでの行為は手段となります。仕事を例に取るのが一番わかりやすいでしょう。仕事には仕事の目的があり、仕事のプロセスはその目的を実現するための手段です。計画を立て、計画に必要な材料や道具をそろえ、予期せず生じるさまざまな障害を克服し、目的を実現していきます。さらに仕事は目的を実現するにとどまらず、仕事をした人にとってそれは経験となり、次の仕事に役立つ能力となります。発達はこのような経験によって実現されていきます。

ところが遊びには、遊ぶことそのこと以外にはどのような目的もありません。つまり遊ぶことそのことが喜びであり目的なのです。反対に、その行為自体がおもしろくて、その行為がそれ自体のためになされるときには、何でも遊びになってしまいます。罰として与えられた庭掃除でさえ、みんなで葉っぱを競って集め始めれば掃除ゲームのようになり、それ自体が楽しい遊びとなります。このようなことは、遊びの研究書には必ず書かれていることです。しかし、保育者や教育学者や心理学者の頭のなかには、発達や教育のほうが遊びより大切だという前提があるので、遊びをそのための手段としてとらえてしまうのです。

保育者も教育学者も心理学者も、遊びには遊びを超えた目的がないという遊びの本質を、もっと真剣に受け止めるべきだと思います。遊びは日常の生活を彩る補完物のように思われますが、遊びは普段の有用性を求める生活とは別の原理を示しているのです。何かのためにするのではない遊び！ 有用な生産活動とは無縁の遊び！ むしろその有用で生産的な活動を破壊するのが遊びの本質

なのです。もっと有効に有用なことのために使えたかもしれないエネルギーや時間を、惜しげもなく役に立たないことに蕩尽（とうじん）することが遊びの醍醐味なのです。

その瞬間、子どもは世界のうちに深く溶け込み世界との一体化が生じます。遊びにおいてはもはや子どもが遊んでいるのではなく、ダイナミックな遊びのなかに子どもが溶けていきます。まるで遊び自体が主人公のようになり、子どものコントロールを超えて自在に進行していきます。遊びのなかで新たな遊びがつぎつぎ生まれていきます。このなかで、子どもは遊んでいることを意識しないまま、現実と遊びとを混乱させることなく、自在に世界のうちに生きることになります。子どもは、泥で作った団子をあたかも本当の団子のように食べるふりをしますが、実際に口の中に入れたりしません。それでもそれは泥の塊ではなく、おいしそうな団子なのです。

あるいは、子どもはよく積み木遊びをしますが、そのとき、せっかく苦労して高く積みあげた積み木の塔を、惜しげもなく自分で破壊することがあります。保育者や親たちは、積み木を積む行為は、仕事のような生産性を感じさせるので肯定的に評価しますが、積みあがった積み木の塔を壊してしまうことには否定的です。しかし、この破壊する否定の力に遊びのダイナミックスがあります。そもそも遊びは仕事のもつ有用性や生産性を否定するものであり、有用性の世界を突破するものです。したがって、作り出したものを壊すことは、遊びの原理にかなっていることでもあるのです。こうして遊びにおいて、子どもたちは秩序だった形態を作り出す楽しさとともに、それを一瞬のうちに消し去り無にすることの喜びを体験するのです。

子どもは遊びの世界の住人だといえるでしょう。この遊びの世界の住人に、仕事を教えることが教育の目的だと考えられてきたことには十分な理由があります。仕事は物や人を目的達成のための手段とするところから、物を人と目的実現のために役に立つという一点でかかわり方を要請します。そのために仕事では、物や人との全体的なかかわりを実現できません。しかし、不思議なことに遊びでは、有用性の世界を破壊することで、物や人との全面的なかかわりを取りもどすことができます。子どもは仕事を学ぶとともに、子どもには遊びが不可欠であり、より深く遊びの体験が深められる必要があります。生きている喜びの源泉はこのような深い体験にあります。このような体験を生きることで世界にたいする根源的な信頼感や安心感を持つことができるのですから、発達はこの体験を苗床にしているのだといってもよいでしょう。

ここに出てくる有用な生産活動の破壊から生まれる喜びの体験は、遊び以外にも見ることができます。絵本のなかにも、同様の体験を見ることができます。また動物との生活のなかにも見ることができます。また見返りを求めない贈与のなかにも、同様の世界と一体化する体験を見ることができます。もちろん子どもは発達しなければなりません。子どもの遊びをただ見ているだけでは幼児教育になりません。そのことについては最後にまた述べたいと思いますが、もう少しこの発達には直接つながらない有用性の世界を破壊する体験について見ていきたいと思います。それは子どもという不思議なありようにあらためて出会うことでもあります。次回は動物になる子どもについて考えてみましょう。あなたの子どもたちは動物になっていませんか？

（京都大学）

特集〈あたらしい〉

カウンセラーの資質

岩壁　茂

私がカウンセリング心理学専攻の大学院に入りたてのころ、カウンセラーとして望ましい個人的資質について講義があった。優れたカウンセラーから推薦された「カウンセラーの中のカウンセラー」に見られる十四の心理的特徴だった。当時は、カウンセリングについてあまり知識がなかったが、立派な臨床家になりたいという願望も本当に自分のような人間がカウンセラーになれるのかという不安も強かった。先生が一つずつカウンセラーの資質を紹介するとき、自分がカウンセラーとして向いているのかど

うかということについて審判が下されるようで緊張した。周囲を見回すとやはり自分と同じようにかなり深刻な顔つきで聞き入っているクラスメートの姿が目に入ってきた。

その中の一つに、「常に新たな気分をもって楽しめる」というのがあった。カウンセリングという仕事は、毎日同じように話を聞いている。その単調さの中においてやる気を維持し、クライエントの役に立てるようになるには、何よりも自分の毎日の仕事に新鮮さを感じることが重要だ。そして、クライエントが伝える悩みの中にも常に新たな要素を発見できなければ、クライエントが変わるきっかけをつかむこともできないだろうということだった。

その話を聞いて、思い出したのは、小学生のころ進んでやっていた野球のバットの素振りだった。同じバットを同じ場所に立って何度も振るだけの単純な動作だ。野球が相当好きでないと退屈でやっていられないかもしれない。しかし、当時の自分には同じ動作を繰り返していたという感覚があまりなかったような気がする。ちょっとバットをもつ角度を変えるとバットが重く感じたり、早く振れたりと、一回の素振りが理科の実験のようだった。今考えてみると本当にそこまで体感できる変化があったのかどうか疑わしい。ただ小学生の自分には一度一度の素振りが繰り返される練習ではなかった。また自分は同じ動作を繰り返すことによって忍耐力や我慢強さを培っていたわけでもなかった。バットを振るとき、自分の中にはそのたびに新鮮さがあり、「楽しみ」がふくらむような小さな魔法があった。

カウンセリングでは、このような新しさが感じられなくなった人たちに出会う。気分が落ち込み、悩んでいると、毎日が単調に繰り返されると感じることが多い。仕事には何の新鮮さもなくただ毎日自分

の目の前へ送られてくる書類を昨日と同じようにこなして、終業時間を待っているように感じる。通勤中に窓から見える景色は、代わり映えのない古ぼけた壁紙のようにしか映らない。時間は刻々と過ぎ、万物は常に変化し続け、この世界に同じものは一つもないし、同じことは二度出来ないとある古代ギリシャの哲学者は言った。ところがこのようなクライエントの世界には新しいものは何一つなく、全て「古ぼけて」いた。

このようなクライエントがカウンセリングを通して変化してくるとその世界がいきいきとしはじめる。その姿の中心にあるのが「新たな気分」であった。もう数十年も見慣れた駅までの道のりにいろいろな発見がある。季節の移り変わりやなんとなく風情がある庭先に心が安まったりする。そして、仕事では小さな変化に気づくようになる。それは些細なことでも、本人にとってはちょっとした「出来事」になるのだ。実際にクライエントの生活の場は全く変わっていないのである。しかし、周囲の全てに魔法がかかったように新しさが散在するようになる。

さて、健康な人は新たな気分をどうやって維持しているのだろうか。これは、心理的な健康の重要な要素でありながら、臨床心理学の研究においてあまり扱われていなかった。臨床心理学はこれまで不安や恐怖心をどのようにコントロールするかということに気をとられ、健康な心がどんなふうにその健康さを保っているのかということはおろそかにしてきた。近年、ミシガン大学のバーバラ・フレデリクソン教授は、喜び、満足などの陽性感情が人間の心の

成長や安定と深く関係すると説いている。喜びを感じている人は、何らかの遊びをする傾向にある。遊びには、普通、前もって決められたシナリオや方向性がないため、どのようなことが起こるのか想像を巡らしたり、予期せぬハプニングに遭遇したり、新たな世界を探検することになる。このような遊びの中で、人は新たな考え方や行動を学んでいくとフレデリクソン教授はいう。決まった目的もなく、楽しむことの中でも、人は心の資源を作るという大切な活動をしていることになる。そう考えると「新たな気分で楽しんでいる」ときは、遊んでいるときで、人が一番創造的になっているときかもしれない。

ただ今私たちはこういった意味での遊びをしているだろうか。世の中はエンターテイメントに溢れている。エンターテイメントは新しいものに溢れているし、私たちは、新しい気分を与えてもらうことをエンターテイメントに期待している。ただエンターテイメントには、私たちの頭や心が新しいことを作り出す余地がなくなっている。私たちは遊んでいるのではなく、エンターテインされているだけなのだろうと思えてくる。

遊びは、人が自分の毎日の生活の中に新しさを作り出すとても創造的な営みなのだろう。そして新たな気分で楽しむということは、世界が本来もつ可能性の世界を十分に味わうための大切な方法なのかもしれない。そう考えると今後自分がカウンセラーとして成長するためには、「新たな気分をもって楽しむ」ということについてもっと考えていかなければ、と思えてくる。当然、その過程を楽しめれば、答えに近づけるかもしれない。

（お茶の水女子大学）

あたらしい出会い

赤澤　もとめ

「あたらしい」の連想で先ず小学校の教諭に聞いてみた。「あたらしい」子を受持った時先生はどんな気持ちになるのだろうかと。先ず「わくわく」する、と。どんな子でも皆可愛い、まるで我が子のようである。だから叱ることもある。叱られても子どもたちは受持ちの先生を慕ってくる。子どもが叱られても尚母親に慕ってくるようだと話していた。小学校教諭をしていた母は教諭としての役割をしながら、母親役割を重ねて我が子の成長発達を見守っていたのだということを改めて想いおこさせてくれた。

この「あたらしい」を現れたばかりでまだあまり時を経ない状態というような解釈をしてゆくこととして考えてみたい。

人は「あたらしい」ことがらに触れようとする時は「わくわく」する気持ちになるだろうと思う。兎にも角にも「あたらしい」ことには興味を示す。それまでに知り得たことがらではないから、たとえ身

に危険がせまっていることさえ知らず気にもせず飛びついてゆく。因みに子どもの行動をみていると、小さな隙間があれば入ってゆく。何があるのだろうと確かめに入るのか、入れるのかなと確かめるのか、そこに何かあれば手で触ってみる。「冷たい」「熱い」「痛い」と思わず手を引っ込める。入ったところから出られない、どうしようと助けを求める。助けのないときもある。あれこれ考える。考える間があればよい。そうこうしているうちに入ったところから出られほっとしている。

或はぐずっている子に「ここにいるよ」との声かけをする。ぐずっていた子は一瞬聞き耳をたてる、どこから聞えるか、誰の声かと考え、母の声かとわかる。生まれる前から聴きなれた声なんだ。近くに母がいると納得しぐずるのをやめる。とはよく母が話していた。こうして次への挑戦が始まり、くりかえされ行動範囲が広がってゆく。「あたらしい」ことを考えて前進することがあたりまえではないか。

困難に出会った時は直感的に考える。困難という壁を壊して進むか、壁を乗り越えるか右か左かへ迂回して前進するかして後戻りは出来ないのだと考える。考えて笑って前進するか、泣いて前進するかはその人の選択にある。人が小さい時は泣くことで自己主張し人の助けを得て納得の援助が得られればにこりとし、さもなければ尚自己主張を強調してゆく時期もある。そして「あたらしい」ことを理解し納得し価値判断を学び行動が決まってゆくのであろう。

人の行動は人夫々に異なっているが、人として生まれる前からの環境による影響が大きいことは多く語られているところである。生まれてくる段階での影響の一つに関心の高い要因はストレスであるという。ストレスはどの発達段階においても影響を及ぼすことは知られている。ストレスは個人差があること、同一個人でも時と場合によっても異なってくる。従来から、いのちの発達途上においていわゆる

胎教の重要性が力説されてきたことが理解されるのである。

こうして「あたらしい」こととしてのいのちの出発点に出会う。この出会いは常に「あたらしい」出会いなのである。そして最大に緊張の出会いであり「あたらしい」いのちを愛でてゆくのである。この瞬間から「あたらしい」いのちは、後天的条件如何によって強く影響を受け、思いがけない方向に変わってゆきやすいのである。後天的条件を如何様に整えてゆくかは人それぞれであるが、発達してゆく子も個々に異なって生育をしてゆく。子のゆく方向を見守り、愛で、子の持った能力を見極め引き出す目、眼を持つことは「あたらしい」ことに挑戦してゆける力量を引き出すことになる。

この力量を養うには生まれた時からの学びによると言える。「あたらしい」ことに興味をもって向かってゆくことにほかならない。生まれる瞬間に出会える機会に恵まれたのは外ならぬ母の導き故である。自分の「みち」を自分で選べる道しるべを示す反面、どう選んでゆくかを静眼してゆくことの大切さを背中に込めていたように思う。

生まれる瞬間から関わるということは、育児の出発点というまさに「あたらしい」ことに出会う瞬間である。「あたらしい」ということを考えるにつれ、如何様にも影響を受けて発達してゆく子に対しての関わりの重要性を痛感する。影響の大きさを思う時、やさしく抱きしめてくれる「あたたかい手」がある。「あたらしい」ことを発見した時、珍しい花を見つけた時、咲かせた時、あらゆる時に抱きしめてくれる手のあたたかさに触れる抱かれた時の子の表情のなんとおだやかなことか。

今日、「忙しい」という生活の中でゆったり抱きしめる時間を逃してきているのではないだろうか。「あたらしい」いのちの出会いに立ち合うたびに、

いのちを愛でることのできる人に成長してゆくであろうとひらめく。そして手のぬくもりを与え、感じあい、抱きしめる時をいかに創り出してゆくかが今問われている課題であると。

堅い道の隙間から苔が、草花が風とたわむれお陽さまと語らいあっている。ほんの少し足を止め、抱きしめる時を探してほくほくしたいものである。「あたらしい」ことに出会える今を大切に、日々転機できる自分探しをしてゆきたいと願っている。

（助産師）

子どもが生きるクラスに向けて

林　明日香

新しい年度となる時期は、前年度の総括と新年度の準備で仕事が殺到するのであるが、なんだか春うららかな気候に助けられ、心機一転、新たな気持ちにさせられる。日常の当たり前になっていることを

改めて見直し、よりよい保育が実現するよう園全体が話し合いを重ねる時期でもある。『新しい』というテーマに寄せて、ともすれば決まっている枠組みのようにある「クラス編成」について平成十六年度の保育実践を通して考えてみる。

一人ひとりにとってのクラス編成

新年度を迎えるにあたって、今年の年長児のクラス編成について話し合う場がもたれた。年中では一クラス二十五人の二クラス、担任はR先生と私であった。その二人がそのまま年長に持ち上がる。子どもは五十人の進級児に四人の新転入児を加えて五十四人。組織上は二クラスとなっているが、園生活では……。年長を、

一クラス（五十四人学級二人担任）にするか、
二クラス（二十七人学級一人担任を二つ）にするか。

今年のこの目の前にいる子どもたちにとって、どのようなクラス編成が質の高い保育を生み出すのか。子どもたちの年中の姿から考えてみた。

A子は隣りのクラスのB子と遊びたい気持ちがあるものの、クラスの壁を感じて遊ぼうとはしない。担任はその壁を取っ払おうと、隣りのクラスと一緒に遊ぶ機会をこれでもかと増やしたが、その壁はコンクリート並み。

C男はクラスのリーダー的存在、人望も厚い。遊びをすすめるときも仲間一人ひとりの気持ちを感じながら、みんなをまとめる力がある。一方のクラスのリーダー的存在であるD男は自分が何事においても一番でありたい気持ちが強く、眉をひそめている友だちに気がついていない。D男にはC男の存在をもっと身近で感じてほしい。誰と誰が一緒になるとよいかを考えて全員を分けようとすると適わぬ人が出てくる。

また自分の気持ちを声にするようになってきたE男。五十四人という大所帯ともなると、一人ひとり

の存在を全員が感じられるのか、一人ひとりの力が発揮されるのか。不安がよぎる。

保護者からは二人の先生の目から我が子をみてもらえると嬉しいという声が聞こえてきた。その気持ちもよくわかる。しかし、二クラスになったとしても年長は五十四人の集団で一つの活動に取り組むことが多くあることや、園内のさまざまな場所で遊びが展開していることを考えると、二クラスになったとしても二人の視線は必ず注がれるであろう。

全てを踏まえると、結局どちらとも決められないが、一クラスとすれば、その中で一つに動くことも可能であるし、二つに分かれて動くことも可能なのではないか。編成はその時のねらいに応じて柔軟に行うことにした。

一クラスとしてのはじまり

新年度、年長児はかえで組一クラスとして発表された。昨年も担任として共に過ごしてきているが、新しい環境に慣れるまでには時間を要する。保育者は神経を張り巡らせ、一人ひとりを感じとろうと必死であるが、五十四人みんなをみきれているかという不安に襲われる。それを補おうと保育後話し合いを密にするものの、日を重ねる毎に不安は増していく。

集まりの場面では一クラスの意識をつくっていくため、保育者の一方が主の立場になり、他方はその補佐をしながら、五十四人が一つの空間に集まる形をとった。紙芝居や歌等を楽しむときはよいが、保育者の話を聞く、子どもたちで話し合いをするには規模が大き過ぎる。それは子どもたちの姿を見れば明らかであった。どちらの保育室で集まってもよいことにして二つに分けてもよかったのだが、それでは集まりの様子を継続してみていかれない。

それぞれの保育者の持ち味を生かし、二人分以上の力が発揮されることをねらっていたが、これでは一人分の力も発揮できていないのではないか。

一クラスを二つにした効果

やはり一クラスを二つに分けようと考えた。八人グループを作り、それを二つの集団にして、そこに担任がそれぞれついて集まることにした。これが大成功であった。

「あっF君がいない！　探してくるね」。グループ単位となって誰がいないか意識されるようになった。「みんな帰りの時間だよー」が「G君、集まるよ。待っているからね」と対個人にも声をかけるようになった。呼ばれたG君もその声の方が確実に温かく伝わり、戻ってきたときに自然と「お待たせ」の声がする。昨日休みだったH子に「風邪だったの？　大丈夫？」と意外な人が心配している。周りの人を意識しながら生活する雰囲気が流れるようになってきた。保育者もまずは自分が担当である半分の幼児の責任をもつことで、一人ひとりの幼児についての育ちを丁寧に考えられるようになった。

二クラスの雰囲気をもちながらの一クラス

一学期後半、目の前にいない子どもの動きも感じられるようになってきたことで五十四名全員をみていけるようになった。五歳児の保育においては、一見好きな遊びをしているように見えるが、ただ何となく過ごしていて、いまひとつ充実していないような状況に出会う。そのようなときオリンピックごっこ（六段の跳び箱や倒立前転、逆立ち歩き等）のような難しいことにチャレンジできる場や時間を、一人の保育者が腰を据えて付き合いながら保障していく。影絵あそびや映画館ごっこで使うＯＨＰ、人形劇やお店屋さんあそびで使う放送デッキ、これら本物の器具を自分たちで用意してより本物に近いものを創り上げていく楽しさを見出していけるように一人の保育者が見守りながら、子どもの出方に応じて環境構成していく。一人の保育者が間接的にじっくりとかかわることが大切であると感じる五歳児。二

人担任ということで、一人が一つの遊びに時間をかけてかかわりたいときは、他方の保育者が全体に意識をもって動くといったことが可能になった。

新たな二つの集団

集まりの場を二つにわけても一クラスという意識を持ち続けている子どもたち。遊びの中で新たな仲間関係が生まれた。

J男は友だちと遊びたい気持ちを上手く表せなかったが、心の通わせられるH男という友だちができた。J男にとってはH男と集まりの場が同じであるとよいのではないか。

M子とN子は常に二人でいることが多く、少し距離を置いたほうがよいのではないか。

P子は不安なことがあると年中からの担任にしがみついて口を閉ざすが、他方の担任の前では不安な気持ちは隠して自分の力で乗り越えようとする姿が出てきた。他方の担任側で集まりをする体験があってもよいのでは。

そこで、今まで組んだことのない人同士で新たなグループを作り、メンバーを見ながら、担任との関係も検討して分け直した。今、ここにいる子どもに出会い、その実態に即してクラス編成を新たな形にしていく。

一クラスのさまざまな分け方

二学期はリレーが盛り上がり、それが運動会にもつながっていった。リレーでは今ある二つの集まりのメンバーで行うことも考えたが、子どもたちだけで相談するには人数が多過ぎる。また勝ち負け二つだけではなく一、二、三位まであった方が救われることもあるのではと三チームに分かれて集まるといった編成も行った。水族館への園外保育もできるだけ一人ひとりがじっくりと見られるように三チームに分かれて動いた。園庭で行う火を使った活動（野菜スープ作り・たき火・焼き芋等）では四チームに分

かれて担当になる日をつくった。活動のねらいに応じて、集団の組み方も三つ四つに変えることで、適した規模の集団で一つひとつの活動に取り組めた。

クラス編成とは

このように『クラス編成』について考えてきたつもりであったが、要は『ティーム保育』の在り方なのであろう。活動の内容や場に応じて、クラスの枠を越えて行う保育が可能なのであれば、二クラスでもよかったかもしれない。ただ、この子どもたちにとってはクラス名を一つにしたことがプラスの効果を生んだように思う。保育者が我がクラスに縛られない、保護者はどちらの担任にも声をかけやすい、そして何よりも言葉へのこだわりが強くなっている年長児にとってはクラス名が一つであることがみんなで一つという感覚をつくってくれる。

年度初めに発表されるクラス編成。当然決まっているかのように思われる事柄について、ちょっと立ち止まって考えてみる、このことは私自身が保育上大切にしていることの一つである。忙しいと感じているときこそ、忘れてはいけない。

つい先日、もちつきの臼について話していたとき「どうして臼に水じゃなくてお湯を入れておくの?」と尋ねられた。熱湯消毒に加えて、水よりお湯の方が水をよく吸ってくれることを伝えたいのだが……子どもと一緒に改めて考えてみる私がいた。「んー、手と同じなのかしら」。お風呂で手が柔らかくなるのと同じように木もお湯の方が仲良しなのかもしれないという話になった。すると「じゃ、臼は生きているのかな?」。頭の中にある情報をフル活用して、一つのことを深く真剣に考えている。毎年使われる臼であり、臼についての話は何度もしてきたが、初めての質問。たとえ、その質問の答えが

すぐに浮んできたとしても、それは横に置いておき、頭を真っ白いノートにして考えてみる。すると、全く同じ答えにはならない。根本は同じであったとしても、目の前の子どもとつくっていこうとすると、新しい形になっていくものである。日々新たな発見を見出している子どもたちから学び、新しい保育へとつなげていきたい。

（駒場幼稚園）

香りがつなぐ新たな出会い

宮崎　薫

梅に、沈丁花……街を歩いていると、どこからか漂ってくる花の香りは、春の訪れを知らせてくれます。その香りを、思いっきり吸い込むと、細胞のすみずみまで目覚めていくような気持ちになります。

子どもたちに向けての「香りの体験学習」に関わり、この春で五年目になります。見る・聴く・嗅

ぐ・触れる・味わうという五感の中で、嗅ぐという嗅覚に着目し、「香りの体験学習」を行なうのは、新しい試みなのかもしれません。

「香りの体験学習」はどんなことをするのだろう、とほとんどの方は思うことでしょう。一番の目的は、香りにふれて、嗅覚を働かせるということを身体で経験的に感じてもらうことにあります。ハーブや植物から抽出したエッセンシャルオイルを持参して、いろいろな香りを体験してもらいます。そして、石けんやバスソルト、ルームフレグランスなどを作成します。香りから学べる知識は、自然、科学、環境、歴史、文学、身体、健康など多岐にわたっています。それらの知識も、香りにのせて伝えていきます。

香りを通じて、人と自然のふれあい、心や身体と向き合うこと、人との関わりの大切さにも気づいてもらいたいと願っています。

私は、この実践で、多くの子どもたちや先生方と出会いました。その出会いの中で、感じたことや思ったことをいくつか紹介いたします。

◇今を生きる子どもたち

初めて「香り体験学習」を実施した時のことです。感想文を読んで、ある一文に目が留まりました。「香りを嗅いで、荒々しい気持ちがすうーっとしました。」そう書かれていました。もしかしたら、そんなに意識せず書いたのかもしれません。でも、自分の心の内を〝荒々しい〟と表現した中学生の言葉から、子どもたちも、大人同様、あるいは、それ以上に、混沌としたストレス社会を生きていることを実感しました。

香りによって、リラックスやリフレッシュした

り、心身のバランスを保つことができます。「香り体験学習」で、〝気持ちいいな〟と思った感覚を大切にしてもらいたいです。そして、〝荒々しい〟気分になった時、香りを嗅いだ時の記憶を思い出して欲しいです。

ある中学生に「ヒノキの香りを嗅いだことはある？」と質問したことがあります。その問いに対し、「はい、あります。入浴剤で」と、明るい答えが返ってきました。続いて、「ヒノキならテレビで見たことがある」という言葉を聞いた時、今の子どもたちは人工的な世界に暮らしているのだなと思いました。ヒノキは、殺菌作用のある香りを含んでいるため、腐りにくく風呂桶等を作る際に利用されてきました。先の言葉を聞いた時、世界有数の森林国で、生活の中に木を取り入れてきた私たちの文化も失われていくように思えました。

「香りの体験学習」では、植物から抽出した天然の香りを嗅いでもらいます。香りを通じて、植物と人の関わりや、香りのある自然環境を慈しみ残していくことの大切さも伝えていきたいものです。

◇新しいものが生まれる時

高等学校の「総合的な学習の時間」で、「香りの体験学習」を実施したことがあります。担当をされた英語科の先生から、「言葉以外に、何か、生徒とコミュニケーションをとる方法がないかと探していた」という思いを聞きました。その高校は、不登校の生徒が多く、「いい香りがするから、あの教室に行こうかなと思ってもらえたら」と考えたそうです。日々、言葉の指導をされている先生が、言葉以外のコミュニケーションの手段を探していたことを知り、とても驚きました。先生と生徒の気持ちをつなぐきっかけに、香りがなれば、こんなにうれしいことはありません。

小学校の図工科の先生と一緒に、「かおりをかたちに」という、授業に取り組んだこともあります。コラボレーションというのでしょうか。香りからイメージしたものを、造形作品で表現するという授業でした。〝造形〟と〝香り〟という異なる分野で、ひとつの授業を実践するのは、刺激的ではありますが、多くの時間とエネルギーを費やしました。終了後、先生はこんな言葉で授業を振り返りました。「ふたつの色を混ぜ合わせた時、澄んだ美しい、新しい色が生まれる場合もある。濁った色になることもある。お互いが研ぎ澄まされていないと、新しく美しいものは生まれない」と。私は、美術の先生らしい表現だなと思うと同時に、香りのブレンドを思い浮かべながら聞きました。その言葉は、私に深く刻まれ、新たに何かに取り組む時、誰かと向き合う時、いつも思い出すのです。

◇幼児と香り

先日出会った五歳児が、大切そうに差し出した、いちごのキーホルダーは、甘い香りがしました。私たちのまわりは、人工の香りが氾濫しています。自然の香りと出会う前に、おそらく生まれた瞬間から、人工の香りを嗅いでいることでしょう。

三歳までは、香りに対する嗜好はなく、成育環境や食生活で、香りに関する嗜好も形成されていきます。幼児と関わる保育者の方やお母さんは、園庭で、公園で、街で、植物の香りと出会った時、たくさん、お話をして下さい。香りは記憶と関わりが深いと言われています。大人になり、ある香りを嗅いだ瞬間、香りと出会った時の風景が鮮やかによみがえってくることでしょう。私も、香りの記憶の引き出しを、ひとつひとつ増やすお手伝いができたらと思います。そして、また新たな出会いが生まれることでしょう。

（東京都江戸川区在住）

私の保育園時代

榎沢　良彦

私が保育園に通ったのは、四十五年も前のことです。現在とは、子どもたちの生活も地域の状況もかなり違っていた時代です。その頃、幼かった私はどのような生活をし、その生活に何を感じていたのか、おぼろげな記憶をたどって、思いだしたいと思います。仕事に追われる日常の中で、幼い時代にタイムスリップすることは、非日常の世界が現れるようで、少し心が躍る出来事です。

私の育った環境

私は千葉県君津郡（現在の君津市）の農村部で生まれ、そこで幼児期を過ごしました。家は農家でしたから、農作業についていっては邪魔をしながら遊びました。農家には納屋があり、そこは子どもにとっては格好の遊び場所で、近所の小学生たちと隠れん坊をしたりして遊びました。よく、裏山にも登ったものです。ですから、友だちと自然が私の遊び相手でした。

農家は今でもそういう家が多いでしょうが、私の家は大家族でした。両親と妹の他に、祖父母、曽祖母、叔父叔母が一緒に暮らしていました。日中は、主に曾祖母が私の面倒を見てくれていたようです。

そういう家庭ですから、私は特に保育に欠けていたわけではありませんし、近所に友だちもたくさんいましたから、保育園に通う必要はありませんでした。しかし、両親には、小学校に入る前に集団生活を経験させたいという考えがあったようで、一年間保育園に通うことになりました。

保育園への行き帰り

農村部ですから、当時、幼稚園はありませんでした。私は家から三キロほどのところにある公立の保育園に通いました。

朝は、近所の小学生の友だちと歩いていきました。ときには父や叔父が出勤途中、オートバイで私を送ってくれることもありました。当然、道路は今のようにアスファルトではありません。砂利や土の田舎道を通ったのです。冬は、霜柱を踏みながら歩くのが面白かったことを覚えています。

降園時には、友だちと連れだって帰りました。帰り道は朝とは違う世界を見せてくれます。先を急ぐ必要はないので、道草を食いながら帰りました。シロツメ草を摘んだり、レンゲ草の絨毯の上で相撲を取ったりしました。小川に入って遊んだこともあります。

このように、当時は、幼児であってもかなりの距離を歩いて通園していました。それは決して苦しいことではなく、いろいろな発見をもたらしてくれる楽しいことでした。

保育園の思い出

ここまで述べてきたように、私は自然の中で幼児期を過ごしました。保育園の行き帰りにも、自然を相手に遊んだのでした。自然は私に大人の日常世界とは異なる、その意味では非日常の遊びの世界を経験させてくれたのです。保育園は自然界とは違う、人工的に用意された物的な環境ですが、私に魅力的な遊びの世界をもたらしてくれました。私が保育園の生活でよく覚えているのは、次の二つの出来事です。

(一)物置の世界

保育園では、私は腕白だったようです。仲のよい男児が一人おり、よくその子と一緒に行動していました。二人とも腕白だったために、担任の先生を随分困らせました。

当時、私の通った園では、年長児たちは保育者と一緒に部屋の掃除をしていたと思います。幼児のことですから、掃除を仕事として自覚するのは難しく、ついつい遊びだしてしまいます。よく、私たち二人はほうきでチャンバラごっこをしました。そのたびに先生に叱られていました。

ある時、よほど私たちの「ふざけ」が目に余ったのだと思いますが、先生に叱られ、反省させられるために、物置に入れられました。当然、叱られた私たちはおとなしくなりました。ところがそれもわずかの間で、私たちは物置の中で遊びだしたのです。

物置の中というのは、子どもたちが普段あまり目にすることのない場所です。したがって、そこは子どもにとっては未知の場所であり、それ故に、そこにあるあらゆるものが注意を引き付けるのです。私たち二人は、すっかり反省することを忘れ、物置の中で遊びだしたのです。腕白の男児にとっては、これ以上望めないくらい楽しい場所を与えてもらったのです。様子を見に来られた先生は、反省するどころか、夢中になって遊んでいる二人を見て呆れたそうです。

(二)幻灯を見る

現在はあまり使われないと思いますが、当時はよく幻灯（スライド）が保育の中で利用されていました。これが唯一の視聴覚機器だったと思いますが、子どもたちはみんなこれを楽しみにしていました。私もこの幻灯を非常に楽しみにしていました。

幻灯のどこが好きだったのかというと、実は、私は幻灯そのものよりも、幻灯を見るために部屋が暗くされるのが好きだったのです。幻灯の時間になると、窓に暗幕が引かれ、普段明るい保育室が、たちまち暗い部屋に変わるのです。部屋が暗くなるというだけで、私はうきうきした気分になりました。

これと同じ経験を私は小学生の時に何度もしました。それは、台風が来たときです。今は雨戸のない家がほとんどですが、私が子どものころには、どの家にも雨戸がありました。台風が来ると、昼間でも雨戸を閉めて備えたのです。幻灯の時と同様に、このときも、明るい部屋が瞬く間に暗い部屋に変わってしまうのです。真っ暗になった部屋の中で、よく懐中電灯を点けて、お化けごっこをして遊びました。

このように、暗い部屋は子どもにとって特別なものではないでしょうか。恐らく、自分一人だけでは、暗い部屋で遊ぶ気にはならないでしょう。友だちや兄弟がいることにより、暗い部屋が魅力的な空間として経験されるのでしょう。私にとって幻灯は、魅力的な暗い空間を生み出してくれる機械だったのです。

幼児の体験世界

右記に上げた保育園での思い出を基に、幼児の体験世界はどうなっているのか考えてみたいと思います。まず、物置という空間のもつ意味を考えましょう。

物置の中は普段目にしないだけに、子どもの興味を引きやすいといえます。しかし、叱られて意気消沈している私たちが遊びだしたのは、それだけが切っ掛けではないように思われます。

物置は壁によって囲まれた空間であり、普段子どもたちが生活している空間と区別されています。子どもたちがいつも生活している空間を、「日常の生活空間」とすると、物置は、子どもが自由には出入りできないという点で「非日常の空間」と言えます。つまり、友だちと私は日常の生活空間から非日常の空間に入り込んだのです。いわば質的に異なる空間に入ったのです。

空間の質が変わるということは、世界が変わることと同じです。そして、それぞれの人が生きる世界の様相は、その人の関心や生き方、態度、意識のありようなどと常に連動しています。したがって、人がある世界から別の世界に入ると、その人の態度・生き方などが変化します。例えば、仕事や労働の世界から遊びの世界に入っ

たとき、私たちの態度や意識は一変します。

これと全く同じことが友だちと私に起きたのです。物置という、日常の生活空間とは質的に異なる空間に入ったことで、私たちの意識が一変したのです。つまり、日常の生活空間で起きた出来事（先生に叱られたこと）は日常の生活空間と共に、私たちの脳裏から消え失せたのです。そういう意味で、物置は子どもに日常の世界とは違う別の世界をもたらすと言えるでしょう。

では、幻灯が行われた部屋はどうでしょうか。部屋が暗くされることは、子どもが物置に入ることと全く同じ経験を生じさせます。物置に入る場合は、私たちが物理的に空間を移動することで別の世界に入っています。幻灯を見る場合は、一つの空間が「明」から「暗」へと変化することで、私たちは別の世界に入っています。別の世界への入り方は異なるものの、私たちが世界の変化を経験している点では同じなのです。

実際に、部屋が暗くなることで、空間の相貌は一変します。明るい空間では、そこに存在しているいろいろなものが明確に区別でき、見ることができます。一方、暗い空間では存在するものの境界は消滅し、明確にものを見ることができなくなります。その結果、何か非日常的なことが起きそうな予感をもたらします。そして、子どもはその予感から少し高揚した気分になります。子どもの気分が変化したことは、まさしく世界の変化を経験したことに他なりません。

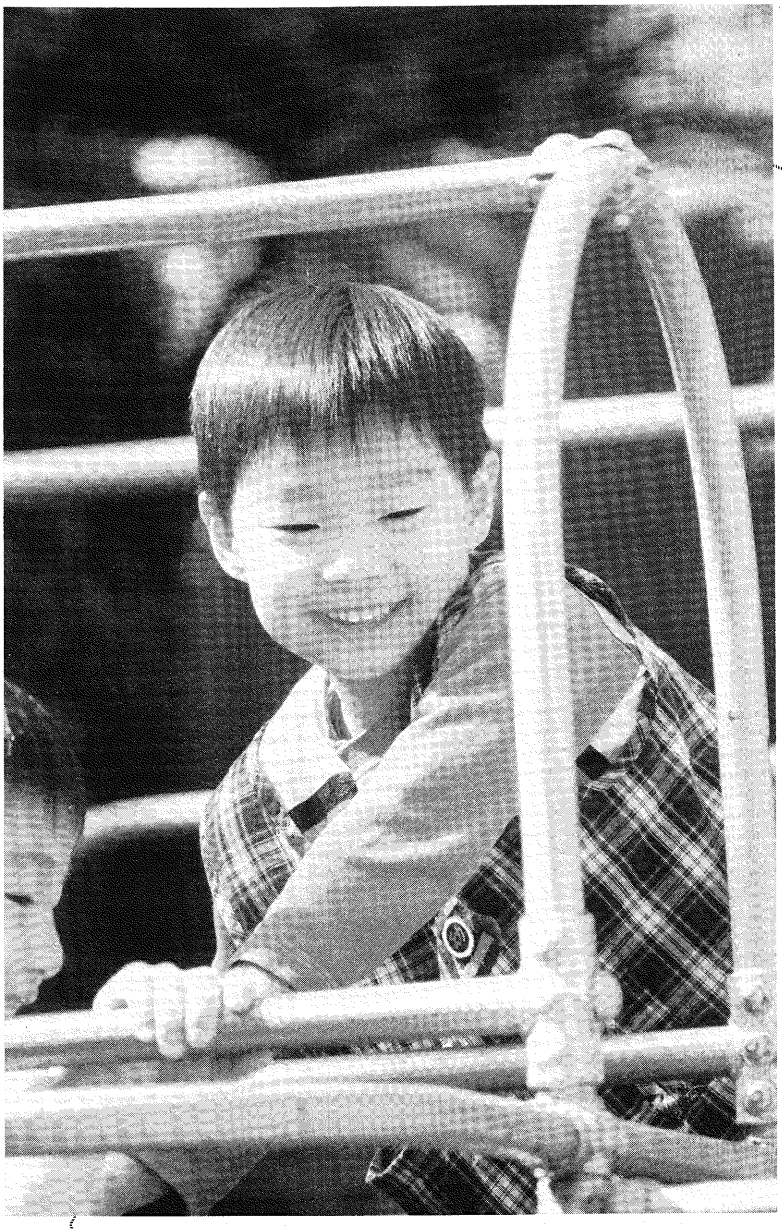
このように、幻灯は、それを見るために部屋を暗くすることで、子どもたちを別の世界に連れ込むのです。それが子どもにとって魅力なのではないでしょうか。

こうして考えてみると、幼児は世界が変化するような出来事に引きつけられるのではないかと思われます。先に、保育園の帰りに道草を食って遊んだことを述べました。幼児は容易に遊びだします。音楽や物語の世界にも容易に入り込みます。これらは日常の仕事の世界とは異質な世界です。生来的に、幼児には、容易にいろいろな世界に入り込む能力があるように思われます。

（淑徳大学）

ある日

撮影・平野　清



映画「誰も知らない」の子どもたち

皆川　美恵子

子どもにかかわる事件が、多発しているからなのだろうか。それとも子どもの事件には、思わず目が行って心がかかってしまうからなのだろうか。日々のニュースの中に、子どもが絶えず登場している印象を禁じえない。

是枝裕和監督の映画「誰も知らない」がカンヌ映画祭で絶賛されたという評判が広がり、さらには現実に起きた子どもの事件をもとに製作されたことを知ると、混み合った公開直前の映画館へ駆けつけた。昭和六三年（一九八八）、西巣鴨で起きた子ども四人置き去り事件が報道されて間もなく、脚本化を構想し、十五年という長い歳月を費やして、二〇〇三年に映画の完成をみたという。映画製作に至る息の長さに驚嘆せずにはいられな

い。事件の中心となった子どもは十四歳であったから、二十九歳になっているわけである。

西巣鴨子ども置き去り事件は、四〇歳の母親が、父親の異なる十四歳、五歳、三歳、二歳の四人の子どもを残し、新しい恋人と暮らす為に出て行ってしまった間に起こった。子どもたちは、出生届けが出されておらず、十四歳の長男は、学校にも通っていなかった。長男が、時折、母から送られてくる現金書留によって、小さなきょうだいの世話をして、ひっそりアパートの一室で暮らしていたのだ。ところが、二歳の妹の死が発覚して、世間の知るところとなる。

この事件を知った是枝氏は当時、二十六歳であり、テレビ制作会社に勤務していたものの、いまだ作品制作には携われずにいた。そして、いつかはこの事件を映画化にと思い続けてきたそうだが、その思いの原点は、十四歳の長男の子どもへの「いとおしさ」にあったという。

死なせてしまった二歳の妹を、秩父の羊山公園の林の中に埋葬し、時折、お墓参りに出かけていた少年。母親と法廷で再会し、母の期待に添えなかったことを自らの責任として涙ぐむ少年。是枝氏は、そばにいたら、「よく頑張ったね」「僕は君のことが好きだよ」と肩を抱いてあげたかったという。それが不可能だから、「僕は、僕の心の中で彼をしっかりと抱きしめるためにこの映画を作ることを決意した。」（『演出ノート』より）と語っている。

子どもの抱きしめ方、子どもへの寄り添い方は、人によってさまざまであろう。映画という映像表現に生きる者にとっての、子どもの抱きしめ方が、「誰も知らない」の映画には示されている。

映画の中のきょうだいは、下から四歳の女の

子、七歳の男の子、十歳の女の子、そして十二歳の長男である。下から三人の子どもたちは、実際に起きた事件の子どもたちより年齢が引き上げられている。長男は、二歳ほど年齢が下の子どもが選ばれていた。

映画は、桃色のスーツケースを大切に運ぶモノレールの車中シーンから始まる。羽田空港の夜景が近づき、スーツケースをさすっている少年の顔がクローズアップされる。突如、昼の光を浴びながらの、母と息子の引越し風景に移る。運び込まれた桃色のスーツケースやカバンから、小さな子どもが出てくる。アパートの大家には二人住まいと偽って、さらに子ども三人を加えて住み着くことになる。

子どもたちは、出生届けが出されておらず、戸籍がない。学校にも保育所にも通っていない。母親が働きに出て、長男・明が専ら子どもの世話をする。買物の外出をしたり、料理らしいことをする。長女はベランダで、ひそやかに洗濯をしている。そしてある日、母親は明に書き置きとお金を託して、四人の子どもを置き去りにする。

明は、やりくりをしながら幼い子どもたちを食べさせる。クリスマスには、安くなったケーキを買う。正月にはお年玉を与える。やがて母親からの仕送りが途絶えると、賞味期限切れのおにぎりなどをコンビニの店員から貰い受ける。電気、ガス、水道が滞納で止められると、公園の水飲み場で洗濯をしたり、身体を洗う。まるで、都市の中で、漂流したロビンソン兄弟のような暮らしぶりになっていく。

やがて四歳のゆきが、不慮の事故で身体が冷た

くなっていく。世間には誰にも知られていない子どもたちだが、公園で知り合った、ゆきが姉のように慕う少女・沙希がいる。桃色のスーツケースの棺に、ゆきを納め、お気に入りの菓子とサンダルも入れる。明と沙希は、兄と姉、そして父と母のように、棺を大事そうに羽田空港へ運び、飛行機の舞い立つ地に埋葬する。

映画の中では幾度か、モノレールが走っているシーンがある。明の父は、羽田空港に勤めていたという説明がなされており、明は父を追いかけるように、モノレールを見つめている。ゆきに、いつか空港に連れて行って飛行機を見せてあげるという約束もしていた。夜、墓を掘り、秘密の葬儀を終えると美しい夜明けを迎える。飛行機が間近で飛び立つシーンと、静かにモノレールが動くシーンは、宮沢賢治の銀河鉄道を思い起こさせる。この時、背景に流れる歌声（タテタカコ「宝石」）は澄みわたり、鎮魂歌のように天空を舞う。

幼いゆきは、いつも小うさぎを持って登場していた。絵本「こうさぎけんたの　たからものさがし」（松野正子作・鎌田暢子絵、童心社）を読んでいるシーンがあったが、絵本の世界のように両親や祖母にかわいがられることはなかった。しかし、明と沙希による優しく手厚い葬儀は、向こうの世界で宝探しをするであろうことを暗示している。

是枝監督はこの映画で、かつての少年をしっかりと強く抱きしめている。それは奇跡のように監督の前に、柳楽優弥という少年が出現したからである。映画は映像の力なしには成立しえない。柳楽優弥の面影は、少年のみが一瞬放つことのできる、たとえようのない宝石のようなきらめきを持っていた。

（十文字学園女子大学）

見る・見える・見えない

永倉　みゆき

その文章と出会った時は、今の自分の胸の内を見透かされたようでどきりとした。それは村上春樹の小説『アフターダーク』の中にあるこんな文である。『……私たちの視点は架空のカメラとして、部屋の中にあるそのような事物を、ひとつひとつ拾い上げ、時間をかけて丹念に映し出していく。私たちは目に見えない無名の侵入者である。私たちは見る。耳を澄ませる。においを嗅ぐ。……観察はするが、介入はしない。』この小説の中には、小説世界を見ている〝私たち〟という主体が書かれており、出来事は、それを見ている私たちの前に起こる事実の描写の列挙によって描かれている。〝私たち〟という主語は出来事の進行の中でいつしか消えていき、読者である私は時

折、登場人物の言動に感情を移入しながら読み進めるのだが、小説世界に完全に溶け込むことはできず、自分と小説世界を隔てるオブラートの様な壁の感触は最後まで残る。しかし、にも拘らず登場人物の気持ちやそこに醸し出される雰囲気の様なものは、わかるのである。

これは正に、私が悩み、それを巡ってぐるぐると考えていたことだ。そのことが、言葉になってこんな風に書かれているなんて。

私は昨年四月に二十三年間いた保育現場を離れ、転職した。今度は子どもが居ない職場であったため、知人のいる保育園で週一回参加観察ができることになり嬉々として通い始めたのだが、しばらくして愕然としたのだった。—記録を細かくとることはできても〝子ども〟が見えてこない。時間が短いからかと時間を延ばしてみても同じである。わけもわからず重い気持ちを抱えて悶々としていた頃、この文章に出会ったのだった。

そうだ。全くこの小説の世界の感触と同じだ。この中に出てくる〝私たち〟とは一体誰だ。見えているものは一体何だ。誰が、何を通して何を見ているのか——。私は今、目の前に展開される出来事を今までになく細かく見る機会をもらっている。それなのに、子どもが見えないと感じている。それならば逆に、今まで私に〝見えて〟いた子どもは何だったのだろう。〝見える〟とはどういうことだったのだろう。

ここで〝子どもが見える〟という感覚について考えてみる。私にとって〝子どもが見える〟時とは、自分と子どもとの関係に一体感が感じられる時だ（気が合う、という意味ではなく、たとえぎくしゃくした関係であってもその軋轢が直に感じられるという意味で）。譬えて言えば、一つのボールを挟んでぴったりくっつき合っている様

な、相手の気持ちがボールを通して感じ取れる様な関係、と言ったら良いだろうか。年度が変わり新しいクラスになった時、最初はボールに譬えるならキャッチボールをしている様な関係を繰り返す中で、私と子どもたち、または子どもたち同士の間に、おぼろげながら何かの形が生まれてくる。すると私の中に何だか身体が広がっていく様な、子どもたちひとりひとりが広がった自分の身体の一部である様な感覚が生まれてくるのだ。

そのことがわかったのは、長く勤めていた幼稚園から小学校に転任になった時だった。一年生を担任した私は、休み時間になると、広い運動場の果てまで遊びに行ってしまえるような（しかも教室は二階）教師と子どもの関係のあり方に本当にびっくりした。運動場の果てで遊んでいる子のことを今までの様に自分とのつながりで感じることができるのだろうかと不安になったことを今でも覚えている。今思えば、その世界の広がり、担任との距離は、大人の庇護のない所で歩き始めた子どもたちの成長の証だったのだろう。幼稚園で私は、実際には全て見ることは不可能であるのに、感覚を広げ子どもたちを感じていることで〝見えて〟いるという安心感をもって生活していたのだった。

学生であった頃、心理劇の授業で「見えない台の上でバランスをとる」という課題が出たことがある、はじめは一人対一人で、互いに台の端に向かい合って立った所をイメージし、相手の動きに合わせてバランスを取り合って動く。次に片方にもう一人が入る。一人対二人になり、また新たに

釣り合う一点を探して互いに動く。そのうちどんどん相手方の人数が増えるに従いこちらの居方の重みが変わっていくのがわかる。体がどんどん広がっていくイメージ。保育者としてクラスの子のことを感じつつ生活するのは、このレッスンの時に得た感じと似ているのかもしれない。保育者であった時の私は、多分子どもたちと〝見えない台〟の上でバランスを取り合いながらその中で子どもを捉えて〝見えている〟と感じていたのだろう。そして、今の私は、子どもの姿は多分保育者で動きながら見ていた時よりもじっくりと見てはいるのだけれど、一緒に台の上でバランスを取り合う関係にないために〝見える〟と感じることができないのだろう。

保育現場を離れ、一つまた一つとこんな発見が出てくる。つくづく保育とは、不思議な体験だったのだと思う。知らない内に、子どもたちと培ってきたものが、私の体の中に、私の感覚の一部となって存在しているのだから。

先日、今の職場に昨年度担任していた三年生の女の子が四人遊びに来た。彼女らが、楽し気に喋り、他愛もないことを喜んで遊ぶ様子を見ていて、今までになく心が和んでいる自分に気付き驚いた。先生と生徒という付き合いの中で、目に見えない安らぎの場がお互いの間に作られていたのだ。確かに。

〝見える〟ということは現実に目に〝見えて〟いるからこそ〝見えた〟と錯覚してしまうのかもしれない。〝見えた〟ことが、私と子どもとのバランスのとり合いの中で〝見えた〟と感じられていたのだということが実感としてようやくわかった。保育の場にいたからこそ得られた宝物であると思う。

（常葉学園短期大学）

たけのこ幼稚園とラジオのおっちゃん(1)

庄籠（しょうごもり）　道子

これは実話にもとづくメルヘンです。たけのこ幼稚園での不思議でおかしな「異」との出会い。薄茶色くなった写真のような懐かしい光景ですが、これは現代の幼稚園で実際にあったお話が元になっています。「ラジオのおっちゃん」登場は次回のお楽しみですが、子どもという「異」との出会いは始まっています。（編集部）

「げたばこ、持ってかえる」の巻

「なんてことを言うの！」

突然、籠（こもり）先生が叫びはじめた。三人組は、ぎょっとした。

園庭で遊んでたんだ。おにごっこして。籠先生もいっしょに。

幼稚園のお向かいの家に、くみとりさんが来たん

だ。トイレにたまったうんちやおしっこを、バキュームカーでくみとってくれる。

「くさー」って**りょうた**が言った。「ほんまや、くさー！」って**たつや**が言った。仲良し三人組だもの。ぼくだって言わなくちゃと、「くさ、くっさー！」**としなり**も負けじと大声を出した。

籠先生の顔色が変わったことに三人とも気がつかなかった。「くさー！」「くっさー！」何回も言った。

「なんてことを言うの！」籠先生が真っ赤な顔で叫んだのだ。突然、身体がぶるぶるふるえている。

「言われた人は、うれしいと思うの？……失礼だと思わないの？……くさいって……くさいって、みんながしたうんちでしょう？……くみとりさんが来てくれへんやったら、あんたの家かて、うんちだらけになるんやないの！」

あまりの剣幕に、三人とも顔色が変わった。籠先生は真っ赤だけど、三人組の方は青くなった。うつむいて「はい」と言うしかなかった。

籠先生はさんざんどなったあと、もうどなる言葉が思いつかなくなったらしく、まだ少し震えながらどっかへ行った。

三人組はこっそりめくばせした。

おい。籠先生って、あんなにこわい先生だって知っとったか？

いいや。知らんかった。

入園して三日、籠先生、ずっとやさしかったなあ。

うん。でも、怒らせるとこわいから、気をつけような。

おお。気をつけよう。

かたづけの時間になり、みんな部屋に入った。三人組はこっそり籠先生の顔を見た。いつもの顔だ。

ほっ。この人、立ち直りが早いらしいぞ。よかった。よかった。

「きょうは十二時に帰ります。今から、おやつを食べます」

竹田園長先生がおせんべいと牛乳を配ってくれた。やったね。

けど、おせんべい、たった一枚かよ。あ、袋にまだ何枚か残ってるぞ。

「先生、おかわり、あるん？」りょうたが聞いた。

「おかわり　あらへん。ひとり一枚」と竹田園長先生。

「でも、袋に……」

言いかけたら、籠先生がじろっとこっちを見た。ああこわー。きっと後で籠先生がこっそり食べるんやな。

「食べた人から、はみがきをして。それで、明日はお休みやから、はぶらしとコップを持って帰ります。袋に入れてかばんにしまおうね」

「はーい」

はぶらしと、コップをしまって、リュックをかけて、水筒も肩からかけて、帽子もかぶって……みんながそれぞれ帰る用意をしていると、たかよが思いつめた顔で籠先生に聞いた。

「せんせい」

「はあい」

「あのね……あの……きょう、げたばこ、持って帰るんでしょ」

「へっ？」

籠先生は目を真ん丸くしてたかよの顔を見た。しばらく、まじまじとたかよの顔を見た後、気を取り直すようにして籠先生は言った。

「たかよちゃん、あんな大きなもの、持って帰られへんでしょ。それに、幼稚園のものをおうちにもっ

て帰られたら、困るんやけど」
今度はたかよがびっくりした顔をしてけげんそうに言った。
「えっ？　幼稚園のやったん？」
「あたりまえやん」
あたりまえだと言われて、たかよはものすごくびっくりしたみたいだった。
「ええーっ、幼稚園のやったん。えー、うそーっ、なんでー……」そこまでびっくりして、たかよは、何かに気がついた様子で聞いた。
「なんで、なんで幼稚園のやのに、たかよって、たかよの名前が書いてあるん？」
「ああ、あれはね、みんなが幼稚園に入園してくる前に、籠先生が書いたのよ」
「うっそーっ、たかよのお母さんが書いたんやで。たかよ、見たもん」
籠先生は、いいかげんにいやになってきたみたいだった。むっとした顔で言った。
「籠先生が書いたの！　誰がどこに入れたらいいか、よくわかるように！」
籠先生の声がきつくなってきたので、三人組は気が気じゃなかった。籠先生を怒らせたらあかんがな。しかし、たかよはめげない。
「入れるって、袋のこと？　えー、あれも幼稚園のなの？　えー、うそー、たかよのお母さんが作ったのに！　なんで、幼稚園は、何でもかんでも幼稚園のものにしてしまうのー？」
叫びながら、たかよは泣き出してしまった。
みんなが寄ってきた。竹田園長先生も
「どないしたん？」と聞きに来た。
たかよは、泣きながら自分のロッカーに走っていくと、うわぐつを入れる袋を持ってきた。そして、
「これ、たかよのお母さんが、たかよのために作ってくれたんや。せやのに、籠先生が、これ、幼稚園

のもんやって言うーっ！」

と、大泣きしながら、みんなに訴えた。

「ひどーい！　たかよちゃんのお母さんがたかよちゃんのために、心をこめて作ったのに、それを幼稚園のものにするなんて！」

あいこやなみかが口をとんがらかして籠先生をにらんだ。籠先生はあせった。

「ちょっと待ってよ。私、そんなこと言うてへんでー」

今度は、たかよは、はいていたうわぐつを脱いだ。うわぐつとうわぐつの袋を並べて

「これも、これも、たかよって名前が書いてあるのに、せやのに、幼稚園のや、言うたー！」

そう言うと、一段と大声を張り上げて泣いた。

あいこたちが

「違うよねー。たかよちゃんのやんねー。かわいそうにねー」

と、たかよの背中をなぜてやっている。籠先生は、困ってしまって小さな声で言った。

「だって、たかよちゃんが、げたばこ、持って帰るって言うから、幼稚園のもの、持って帰ったらあかん、言うたんや。……うわぐつを持って帰るって言ってたんやね」

たかよが、突然、ピタリと泣き止んだ。

「えっ？　げたばこと、うわぐつって、違うん？」

一瞬、部屋中がしーんと静かになった。竹田園長先生が、まず笑い出した。わけがわかった子は笑った。何だかよくわからない子も、つられて笑った。

（保育研究グループ　はるにれ）

障碍をもつ幼児の保育(31)

―この子と出会ったとき―

津守　真(M)
津守　房江(F)

この子と生きるうえで大切にしてきたこと(3)

子どもと「いま」を生きる

F　朝、子どもが目覚め、きげんよく自分から起きてきて、何をしようかと昨日の続きのおもちゃを見たりしているときは、大人も今日の一日の明るい予感を感じます。でも、毎日の生活の中ではいつもそうはいかなくて、パジャマのままいつまでもうろうろしている子どもを、追い立てて着替えさせたり、子どももぐずったりします。

幼稚園や愛育にやってくる子どもは、そのような現実

の中から出てくるのでしょう。

なかなか門から入ってこないで、私が門まで迎えにいってやっと入ってきたK君のことやAちゃんのことなど一人一人の小さかったときの様子を思い出します。でもそんな子が自分から入ってきて門のわきの大きな石に手をかけて、やっこらしょと持ち上げているときは、力がみなぎっているのだろうと嬉しくなります。子どもと生きる一日のはじめには、大人もいろいろな思いを持ちますが、あなたはどうですか。

M　私は子どもたちの中に入るとき、偶然に出会うことになった子どもとの一瞬の交わりを大事にしたいと考えています。保育の中では一瞬一瞬が子どもに心を向けながら生きることになりますからね。子どもたちはこの園の中で今日しようと思っていることがあるのです。それに応えようとし、子どもが解決しようと願っていることには一緒に考えます。言葉で話すことがうまくない子は、その表現が非常識に見えることがあります。でも心は真剣なのです。

こんな一瞬を積み重ねて、一日となり、一週、一月、一年が作られるのです。子どもも大人もそのことは同じです。

K君の心の繊細さに応えながらの一日

F　はじめに話したK君のことですが、愛育の家庭指導グループ（小さい子のグループ）に在園し、小学部を卒園して、地元の養護学校の中学に進みました。とても朗らかで楽しいことが大好きですが、またとても繊細な心の持ち主です。そのことを強く感じたのは入園したてころ、朝の出会いのときに見せた羞恥心です。木の陰に隠れてなかなか入ってこなかったり、部屋では壁のほうを向いて壁に向かってひとりでボール遊びをしていました。次第に親しくなってきて、外で遊ぶことも多くなりました。それでも降園のときの大変さはいまも忘れられません。泥んこになって遊ぶのでどうしても着替えをしなければならなかったのですが、なぜあんなに大騒ぎをしたのか、私の理解もそこまでは及ばなかったことを、

大いに反省しています。

M　ああ、あのときの大騒ぎは忘れられませんね。着替えるとき服を脱がなければならないけれど、自分の裸を見られるのがいやで騒ぐことに私たちも気がついて、子どもの繊細さを思うと、無理に全部着替えないでも済むようにお母さんに衣服を考えてもらいましたね。後になってテレビの相撲番組が大好きになったのは、自分にとって極端に嫌いだった裸を平気で見せているお相撲さんに尊敬を感じたのだろうか。（笑い）

やがて、お気に入りの保育者を連れてきて、お相撲を取らせていました。みんな笑いながら「ハッケヨイ」とやりました。私も随分やりましたよ。もちろん裸じゃないけれど。

F　しだいに成長してクラスが進むと、もっと若い活力のある人と遊ぶようになって近くの公園に行くようになりました。公園で何をして遊ぶのか一緒に行った若い保育者が保育後の話し合いのとき、感動して話してくれましたね。K君はおんぶをして大声で「おかあさーん」とくりかえし叫ぶのだそうです。この子にとって、おんぶをされることも肌を接することで、ためらいがあるし、「おかあーん」と呼ぶこともとても恥ずかしいことだったのです。そのころ小さかった妹が成長してお母さんにくっついたりするのを、K君はあんなことをしてもいいのかと驚いたり、うらやましく思ったりしたのでしょう。

M　公園なら知っている人に見られないから言えたのだろうね。

F　K君の気持ちに気づいた驚きを若い保育者が興奮して話してくれたのも、自分の情報や感動をシェアー（注）することでとてもよかったですね（注・現在私はアジアの女性と子どもを暴力から守るシェルターに手伝いにいっています。そこで使われる言葉で、物や経験を分かち合うという意味のいい言葉だと思います）。

M　保育の後に保育に参加した人達が話し合うことは、いまも愛育で大切なこととして続いていますよ。

真剣に生きる「いま」を積み重ねて成長する

F　ある日、K君が若い保育者と公園に遊びに行って園に戻ってきたのが、降園時間の過ぎるころでした。それなのにそれから大積み木を積みはじめました。はじめは、もういいでしょうという気持ちで私は見ていましたが、真剣に体で支えて積み上げていくのです。その迫力に目を見張るようなものを感じて、次第にこの子がいま表現しようとしていることを理解したいと思って見ていました。

自分の背よりも高くなると、最後の一つは保育者に手伝ってもらって、やっと上に上げられました。それは見事だったのです。

M　そうそう、みんなから拍手が起こったね。

F　私はそのことを考えるとき、なんだか熱いものを感じてしまうのです。

一日の中でいろいろなことをやって遊んだそのことが、一つ一つの積み木のようで、それを積み上げて、保育の一日の終わりに、思いっきり高いものを作った。一人では出来ないけれど、この保育者にたすけられて作らずにはいられなかったのだと思いました。

M　「いま」を積み重ねて生きるとき、その子らしい一日があり、またその先に次の日があって未来へ向かって成長していくのですね。

子どもは「いま」をどのように表現し、大人はどのように受け取るのでしょう

F　K君が自分の一日をこのように表現して、「おもしろかったよ」と伝えようとしたことは、私の勝手な解釈のようで、半信半疑でしたが心に残っていました。

それからかなり時がたって、小学部を卒業するころに

なったとき、私はK君の成長した様子を見たいと思って朝から大きい子のクラスに入りました。

M　そのころあなたは、もうK君のクラスではなく久しぶりに会ったのですね。

F　そうです。彼は照れに照れて体全体で身をよじって笑って、やっと姿を現しました。彼は楽器に凝っていて、保育者に励まされて次々と管楽器を出してくるのです。一番大きいのはチューバで、ケースの蓋を開けて金ぴかに輝くのを見せてくれました。そしてつぎつぎとトランペットやトロンボーンを出してきて最後になつかしいおもちゃのラッパが出てきましたが、これは幼児期に吹いて遊んだ赤い紐のついたものです。

M　楽器は大体地域の広報に『おゆずりください』という広告を出して、事情を話してゆずっていただいたものです。そういう好意や努力で得たものなんですよ。

F　私は小さいラッパを見たときK君が「僕はこんなに小さかったけど、大きくなったでしょ」と言っているように思えました。過去から現在へ、堂々と生きているようです。でも、テーマは同じなんですよ。何が変わったかと言えば、恥ずかしがりながらも自信をもって自分の思いを表現していることです。

M　ああ、それはこの子に関わった大人たちが本当に丁寧に接し、信頼して見ていたからだと思います。弱い崩れやすいこの子の自我を、いつも「それでいいんだよ」って肯定的なまなざしで見ていたからでしょうね。

幼いころのお母さんの忍耐強い日々の生活は本当に感心しました。悲壮ではなく楽しんでやっているのですね。だから無理がないのです。

F　もうじき一年一回の同窓会です。青年になったK君は福祉作業所で働いていますが、同窓会をとても楽しみにしているそうです。そんなに楽しみな過去があることを周りの人からも羨ましがられているそうです。

（保育研究者）

昭和戦中期の保育問題研究会の活動(7)

保育案の研究

松本　園子

保育の目標、目的実現のために、対象児童の心身の特性をふまえ、どのような内容を、どんな方法で実施していくかという保育の計画が「保育案」（今日の用語を使えば、「保育計画」「指導計画」あるいは「保育カリキュラム」）です。保育案作成のためには、保育観、児童観が問われ、子どもの発達や生活環境についての理解が要求され、保育の内容と方法に関する研究が必要です。したがって、保育案の研究は保育に関する総合的研究といえます。

保育案の研究は、保育問題研究会が当初から会を挙げて取り組んだテーマであり、本連載でこれまで取り上げてきた保育内容の様々な研究を関連付け、総合するものでした（註1）。

一、保育案研究の課題設定

第一回月例研究会（一九三六年十月）のテーマは「幼稚園・託児所における保育案」で、この日は「託児所と幼稚園は何処が違うか」「保育案とはどんなものか、これを立てる必要があるか」等の基礎的な問題について話し合われました。その後、保育案は第一部会の研究課題となりました。

部会では理論家、実践家を招き、保育案研究のための視野を拡げました。また、コロンビア大学附属幼稚園のコンダクトカリキュラム、東京女高師附属幼稚園の系統的保育案、和田実『実験保育学』など、それまでの保育案にかかわる内外の成果から学びました。こうしていよいよ会としての保育案作成に着手したのです。

第一部会は一九三八年一月から保育案についての調査、検討に取り組み、会誌四月号に早くも研究報告が掲載されました（註2）。その冒頭には「多くの所謂託児所が、終日漫然と子供を遊ばせるか、でなければ、子供の生活環境を無視して幼稚園の模倣に過ぎない保育を行って」おり、一方「幼稚園の保育が、やゝもすれば型にはまって、清新な生活性を失おうとしている」と、当時の保育と保育案に関する状況認識が記されています。

ここでは、保育日課の例として、日本の幼稚園一箇所、託児所三箇所、アメリカの保育施設三箇所の日課があげられていますが、「放育」という皮肉な言葉で批判的に紹介されているD託児所の日課は次のようなものでした。

D託児所日課　保姆三、児童六〇

八・〇〇～一一・〇〇　放育（保姆茶呑語り合い）
一一・〇〇～一一・三〇　おならび
一一・三〇～一二・三〇　昼食
一二・三〇～　三・〇〇　放育（保姆茶呑語り合い）
三・〇〇～　三・三〇　おやつ

三・三〇～　四・〇〇　おかえり

「放育」は単なる保育者の怠慢ではなく、託児所保育の課題と方法が確立されていないことの反映でもありました。保育施設の日課を定めることについては、子どもたちの自然な生活を尊重する児童中心主義の立場からの批判論がありましたが、実際の子どもたちの生活からは特に基本的習慣を基底とする保育日課が必要であることが確認されました。

二、保育案形成の試案

一九三九年のはじめ、会全体で保育案研究に取り組むため「保育案研究委員会」が組織され、委員会の成果として保育月案と保育日誌の形式の試案（表1、2）が三九年四月号の会誌に発表されました（註3）。ここに示

▼表1　保育月案様式

昭和　　年　　月　保育案　　幼稚園（幼児数　　名）託児所（保姆数　　名）

項目		目　標	第一週	第二週	第三週	第四週	整　理
基本的訓練	清　潔						
	食　事						
	排　泄						
	着　衣						
	睡　眠						
社会的訓練	規　律						
	社　交						
生活教材	観　察						
	談　話						
	作　業						
	音　楽						
	遊　戯						
	運　動（幼児体操 遊具使用）						
主　題							

された保育項目の取り上げ方によって、保育内容の構造がどのようにとらえられていたか見ておきましょう。

試案の説明の中で「項目の取り上げ方」については、幼児保育に必要と思われる面として、①基本的な生活習慣の自立、②団体生活の中に培う健全な社会性、③発達段階に応じた心的経験と自己表現、④その総てを通じて流れる身体的健康のための配慮、があげられています。順に「基本的訓練」「社会的訓練」「生活教材」に対応し、最後の「身体的健康」は全体を通じて実現される、ということでしょう。

▼表2　保育日誌様式

月　日	曜日	天候	出席数　名
主　題			
予　定	方　法	記　録	
基本的訓練			
社会的訓練			
生活教材			
自由遊			
実施経過	7　8　9　10　11　12　1　2　3　4　5		
備　考			

「基本的訓練」については、食事、清潔、排泄、着衣、睡眠、の五項目を取り上げて、その自立の段階を細かく留意する、とあります。

「社会的訓練」については、規律として団体生活に於ける秩序、整理、団体行動の訓練及び社交として人的交渉に於ける種々な問題（孤独、交友、喧嘩、協同、作法等々）を社会性の立場から指導する、とあります。

これら二つが一般に「生活訓練」と呼ばれていた内容ですが、項目の数だけみてもウエイトが高く、保育における位置付けも、先にふれたようにその基本になるものとして重視

されていました。

これに対して「生活教材」については、知的情操的な面を啓発する為に取り上げるべき項目で、従来の保育五項目と、もう一つ、健康の立場から提案した運動の項目を試みに加えてみた、とあります。また保育五項目の「手技」は、もっと広く工作、栽培、飼育等々をも含めて「作業」とし、「唱歌」は、音に対する教育という意味で「音楽」と改めてあります。

「生活教材」という新しい用語を使うことについては「必ずしも適当な言葉とは云へない」としているだけで、特別な説明がありません。保育においては生活訓練を第一義的なものとし、観察等の六項目はそれ自体を目的とせず、生活訓練のいわば〝教材〟と考えたゆえでしょうか。

保育案研究の最初から種々論議のあった「主題」は最下段に置かれました。各項目の系統的な発達段階を縦にみて、そこから適当と思われる保育主題を選択するのが妥当と考え、月案においては総括的な役目を負わせました。

三、保育案形式による記録と検討

保育案研究委員会の試案は「保育案」の提案というよりもむしろ、望ましい「保育案」を共同で検討、作成してゆくための具体的方法論の提起でした。保育内容の独自の項目と構成を打ち立てたことは重要ですが、試案の冒頭に掲げられた「はっきりした見通しを持つ保育案」の作成を実現するためには個々の項目について、年齢・発達段階、あるいは環境条件にそった課題、指導方法が明らかにされなければなりません。しかし、当時の会の各分野の到達点をみるならば、それはわずかに「基本的訓練」について山下と第二部会の研究によってある程度すすめられていたにすぎません。この課題は試案の実践を通じてのその後の研究に委ねられました。委員会の報告は「多くの会員がこの試案を実験して、種々問題を拾

い上げ、発展させてゆくのでなければ『私達の保育案』は出来上がらない」としてその後の研究方法の提案で結ばれています。

そこで、月案と日誌の用紙を使って記録を重ねてゆく段階にはいりました。「保育月案と保育日誌の様式の試案が出来上がるまでにも、ずいぶんの努力が要りましたが、それにも増して記録活動は中々に根気を必要とする仕事です。しかし、この地道な仕事を抜きにして、何時の日にか日本の幼児教育の科学的建設が達成されるのかと思う時、新しい勇気も湧いて来るのです」（註4）と、その意義が強調されました。

四、計画と実施の例

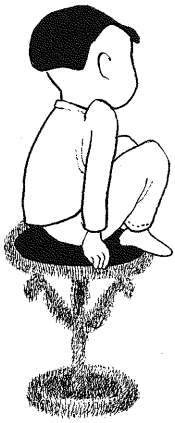
三九年四月、会のバックアップで開設された戸越保育所では、率先して試案を利用した保育案が立てられ記録がつけられました（註5）。

戸越保育所では、例えばスモックの着脱を基本的習慣の着衣の課題として取り上げました。

スモックの着脱は、朝登園して着る、午前中着衣調節のとき脱ぎ着する、午後昼寝の前に脱ぐ、昼寝の後に着る、夕方帰りの時に脱いで掛けておく、と毎日の生活の中でたびたび経験することでした。これを、子ども自身が自分の意思で自由に出来るようにすることは、大切なことでした。

四月に入園した子どもたちの状況は様々でしたが、四月中は個々に保育者が手伝い、一人で着ようとすることを導く、という配慮がなされました。

五月の保育案では、「着衣」の目標として「上着着方（袖を通す、スナップかけ）」とし、第一週は「上着を



一人で着る」、第二週は「着衣の調節を自発的に」、第三週、第四週は「上着の着方（袖を直して）」と週ごとの目標を決めて取り組んだ結果、整理欄には「着方の方法を一定したので皆が面白がり殆どの子ができる」とあり、この月の目標は達成されたようです。

スモックの着脱についての五月の保育の実際は次のようなものでした。

第一週・・・「一人で着ること」とし、手伝ってもらわないこと。着方速度はまちまちであるが、二、三の子を除いて、とにかく着られる。

第二週・・・第一週に同じ。

第三週・・・方法を大体一定し指導、初め袖を裏返し（引き出す）、裏を見て衿を両手に持ち、一・二・三で背にかぶり片手ずつ袖に入れる。衿が、きちんと出ているかどうかを見る。スナップは上から順番にかけてゆく。（裏、表の分からぬ子、スナップを間違ってかける子、一番上だけかからぬ子等あり。）

第四週・・・継続

六月初めに一四名の幼児について調査したところ、着脱指導の成果は次の通りでした。

着る―全部一人で着る

前から後ろへかぶる子　六名

片方ずつ袖を通す子　八名

スナップかけ

片ちんばにはめた子　二名

下からはめた子　一名

上からはめた子　一一名

衿　一名だけ出せず。

脱ぐ―二人一組に一・二・三でしたので殆ど全部乱暴に引っ張ってスナップを外した。

一名だけ一つずつ外して行った。

一名、着る時の為に、袖をおさえて表を出したまま脱ぐ。他は全部裏返しに脱いだ。

時間―一番早い子　五〇秒（六歳女児）
　　同　遅い子　五分（四歳男児）
　　平均して
　　五・六歳児　一分
　　四・五歳児　一分半～二分半
　　三・四歳児　三分半～五分

スモックの着脱、というごく日常的なことがらも、保育の計画に位置づけ、意識的に取り組み記録することにより、ひとりひとりの子どもの生活と発達の様々な面が現れてきます。また保育条件や方法の問題も浮かびあがってきます。

＊

こうした積み重ねによって、幼児の生活の各方面の発達段階を知り、合理的保育案の基礎となる研究を進めることがめざされました。

保育案の研究は会の末期まで課題として意識されていましたが、戦時体制の強化の中で、共同研究の条件が次第に厳しくなり、当初予定されていた組織的研究は充分に展開されず、多くの課題が残されたままになりました。

（淑徳短期大学）

註

1　保育案の研究については、拙著『昭和戦中期の保育問題研究会――保育者と研究者の共同の軌跡／一九三六～一九四三』の二部一章七節「保育案」でとりあげている。

2　第一部会「保育案の研究」『保育問題研究』二巻四号、一九三八・四

3　保育案研究委員会「保育案の研究」『保育問題研究』三巻四号、一九三九・四

4　保育案研究委員会「保育案の研究」『保育問題研究』三巻七号、一九三九・七

5　戸越保育所「保育案記録報告」同右

編集後記

今月号から連載が三本新たに登場する。矢野先生のスリリングな教育論、庄籠先生による童話のようなドキュメンタリー、そしてシリーズ「私の通った幼稚園・保育園」、春風のように新鮮、と感じていただけるとありがたい。

「あたらしい」を主題に、領域の異なる方々から文章を寄せていただいた。過去と未来を変化でつなぐ文脈の上に「新しい」があり、希望や期待を折り重ねて、大人はそこに子どもの発達を託す。四月は入園、入学を目前にして、ときに当の子どもをよそに喜びはしゃぐ大人の姿を見かける。子どもの方が大人に合わせてくれているような気もしてくる。

新しい命を迎える者として、助産師の赤澤先生は「手のぬくもりを与え、感じあい、抱きしめる」ことの大切さについて書かれた。子どもという存在の新しさについ目が引かれがちになる中で、周囲の大人が「急がなくてもいいよ」とその存在を抱きしめてやる余裕が必要なのだと思った。過去の時間を子どもより多く持っている保育者が、いつも子どもと新しく出会うことは難しい。しかし逆に、古い面を持っているから、子どもの新しさを前にしていとおしく思えたり元気が出たりするのかもしれない。子どもと向き合う時間を持っている大人は恵まれていると思いたい。映画「誰も知らない」の母親は、子どもから離れて新しくなろうとしたのだろうか。（浜口）

幼児の教育

第一〇四巻　第四号
（二〇〇五年四月号）
定価五五〇円（本体五二四円）

発行　平成十七年四月一日
編集兼発行人　浜口順子
発行所　日本幼稚園協会
〒112—8610 東京都文京区大塚二—一—一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
印刷所　図書印刷株式会社
〒108—8620 東京都港区三田五—一二—一
発売所　株式会社フレーベル館
〒113—8611 東京都文京区本駒込
六—一四—九
☎〇三—五三九五—六六一三（営業）
☎〇三—五三九五—六六〇四（編集）
振替　〇〇一九〇—二—一九六四〇

☆　本誌ご購読のご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

好評発売中！

もう一つの子育て支援

保護者サポートシステム

友定啓子・山口大学教育学部附属幼稚園／著

豊かな子育てのための“保育参加”ガイドブック

AB判　96頁　定価1,995円（税込）

保護者が保育に参加することで、保育が豊かになり、子どもが豊かに育つと同時に、保護者も成長していきます。保護者による「保育参加」を“子育て支援”の目でとらえ、園や保育者が、保護者とともに子育てをしていくことがどんなに大切なことかを、具体的な事例とともに明らかにしています。巻末に「保護者成長支援プログラム」「保育参加ガイド」を収録。

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部（03）5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育　第一〇四巻　第四号　平成十七年四月一日（毎月一回発行）昭和二十三年四月十五日第三種郵便物認可

「パワーアップ保育SERIES」第7弾！

最新刊

折り紙初心者に最適！

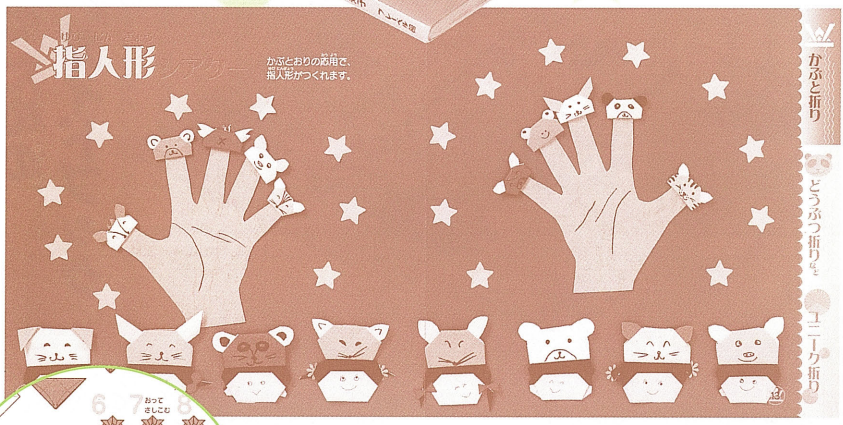
かんたん基本折りから夢が広がる！

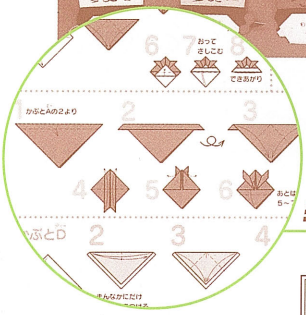
おりがみワンダーランド

かぶと折りほか編

川並知子著

17×18cm　48頁
定価998円（税込）





カンタン！
わかりやすい！
折り方説明。

子どもと保育者がいっしょにつくって楽しめる折り紙のアイデア集『おりがみワンダーランド　チューリップ折り編』の続巻。「かぶと折り」など、複数の基本折りを展開させ、新しい世界を創造していきます。

『おりがみワンダーランドチューリップ折り編』
川並知子著／定価998円（税込）も 好評発売中！

定価　五五〇円（本体五二四円）☆

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部（03）5395-6608にお問い合わせください。